

「敬老の日」のおはなし
～門脇政夫物語～



○ 多可町観光交流協会育成部会 部員

宮崎 和明
門脇 かおる
大井 精道
松本 寿朗
足立 壽
西田 公世
佐藤 俊樹
大塚 貫哲

○ 紙芝居制作助言者

埴岡 真弓 (播磨学研究所研究員 (コーディネーター))
藤井 英延 (多可町観光交流協会会長)
安平 勝利 (多可町教育委員会・那珂ふれあい館館長 (アドバイザー))

○ 参考文献

副読本「わたしたちのふるさと多可町」 多可町教育委員会

「敬老の日」のおはなし
～門脇政夫物語～

2020年3月発行 9場面

発行 多可町
〒679-1192
兵庫県多可郡多可町中区中村町123番地
電話 (0795)32-2380(代)

編集 多可町観光交流協会育成部会

イラスト 安倍 加織

印刷 ウニスガ印刷

①

「敬老の日」のおはなし
けいろう ひ
かどわきまさおものがたり
門脇政夫物語

②

よしおは、神戸の小学校に通う十歳の男の子です。

カレンダーを見て、にこにこしています。

よしお「やったあ。あしたから三連休や。三日も休みがつづくぞ。

なにをして遊ぼうかな。」

おかあさん「どこかへでかけましょうか？」

よしお「そうや。八千代のおじいちゃんのところへ泊まりに行こうよ。」

神戸から車で一時間三十分、多可町の八千代区は、おかあさんのふるさとです。

よしおは、緑に囲まれたおじいちゃんの家が大好きでした。

おかあさん「そうね、行きましょう。でも、月曜日は敬老の日だから、おじいちゃんは敬老会でおるすよ。敬老の日はね、おか

あさんの生まれた多可町の八千代からはじ

まった祝日なのよ」

よしお「えっ、ほんとう!？」

おかあさん「そうよ。記念の石碑もあるの。敬老の日がどうしてできたか、よしおにも話してあげなきゃね」



③

敬老の日をつくったのは、今からおよそ百年前、明治四十四年に生まれた門脇政夫という人でした。

おとうさん「ようきたなあ。多加野から、中野間まで、遠かったろう。」

政夫は、加西郡多加野村、今の加西市でうまれましたが、七歳のとき、今の多可町八千代区にある中野間にやってきました。

おかあさん「さあ、はよう、おはいり。おかしがあるよ。」

あたらしいおとうさんも、おかあさんも、政夫をあたたくむかえてくれました。

政夫は、勉強熱心な、こころやさしい少年にそだっていきました。



あるとき、政夫は、脊椎カリエスという病気にかかって、入院しなければなりませんでした。

すると、元気のない政夫をよろこばせようと、おとうさんが手品師をよんできてくれたのです。

手品師「たねもしかけもないハンケチが、ほらこのとおり。あっというまに、じゅずつなぎー」

政夫「わあ、すごい。」

おとうさんも、にこにこして、手品を見ています。

政夫「おとうさん、ありがとう。」

政夫は、自分もおとうさんのように、人を大切にする人になるうと、心にちかいました。



政夫は、三十五歳で、野間谷村の村長になりました。

昭和二十二年、戦争がおわって、二年がたったときのことです。

政夫「平和にはなったが、まだまだ、みんなの気持ちはあれたまままだ。」

わかい村長の政夫は、なんとか、みんながあたたかい心ですごせる村をつくりたいと思っていました。

政夫は、子どもたちを戦争におくりだし、つらい日々をおくつているおとしよりたちの元気がないようすが気になっていました。

政夫「がんばって生きてきたおとしよりたちを、もっと大切にしなければ。なにか、おとしよりたちが、元気になるようなことができないだろうか。」



政夫は、村のおとしよりたちを集めて、おとしよりをうやまう会、敬老会を開きました。

九月十五日、すがすがしい、秋晴れの日でした。

おとしより1「わしゃ、オート三輪にのったのは、はじめてじゃ」

おとしより2「わたしもじゃ。村長さん、きょうはなにがあるんですかのう?」

政夫「よく来てくださいました。今日は敬老の日、みなさんのための日です。」

講堂に集まったおとしよりたちを前に、政夫は、心をこめてあいさつしました。

政夫「おとしよりは『一家の宝』です。わが村にとっても、だいじなかたたちです。長いとしつきを生きぬいてきた、りっぱなかたたちです。みなさんが、いつまでもしあわせにくらしてくださいることをおいのりして、きょうの会をひらきました。」



敬老会では、八千代のおとしよりたちが大好きな、播州歌舞伎がえんじられました。

おとしより1 「やっぱり、しばいはええなあ」

おとしより2 「まつりみたいやなあ。」

おとしより1 「ありや、村長さんとちがうか」

おとしより2 「ほんまや。村長さーん、うまいなあ。」

政夫は、いっしょうけんめい、おしばいをしました。

敬老会で見たおとしよりの笑顔が、政夫の心をうちました。

政夫は、九月十五日を「としよりの日」とさだめ、村の祝日として祝うことをきめたのです。



政夫がよびかけてはじまった、おとしよりをうやまう」としよりの日」は、ほかの市や町、村にひろがっていきました。

そして、兵庫県全体でも、敬老会がひらかれるようになりまし
た。

政夫「こどもの日とおなじように、としよりの日も、国中でい
う祝日にすべきだ。こどもも、おとしよりも、みんなで大
にしなれば。」

政夫は、なんども、なんども、東京にいき、国のお役人たちに
はたらきかけました。

そして、昭和四十一年、九月十五日が「敬老の日」として国の
祝日になったのです。

昭和六十年には、発祥の地、多可町八千代区に「敬老の日」
提唱の日」ときざまれた、りっぱな石碑がたち

ました。



よしおは、おかあさんのはなしが終わると、じぶんの部屋へやから、えんぴつやいろえんぴつを持ってきました。

よしお「おかあさん、びんせんある？」

おかあさん「どうしたの？」

よしお「日曜日にちようび、八千代のおじいちゃんのとこに行く。そんなとき、

おじいちゃんに、てがみをあげるんや。ほく、おじいちゃん、

だいすきやから。」

おかあさんは、びんせんをとってきてくれました。

おかあさん「敬老けいろうの日の石碑せきひも、見みに行いこうね。」

よしお「うん。おじいちゃんといっしょに行いく。」

よしおは、いっしょうけんめい、おじいちゃんのがおえを描か

きはじめました。

おしまい

